

(曾於郡志布志町帖)

位置と環境

遺跡は町の中心部から東北に約1.2kmのところで石踊台地にある。石踊台地は標高約50mのシラス台地で標高350mの陣岳の西側に広がる舌状台地で、北～西側にかけて前川が流れている。

この台地上には、昭和42年に発掘調査が実施された山ノ上遺跡があり、縄文時代早期の塞ノ神式土器などが出土したことが知られている。

調査の経緯

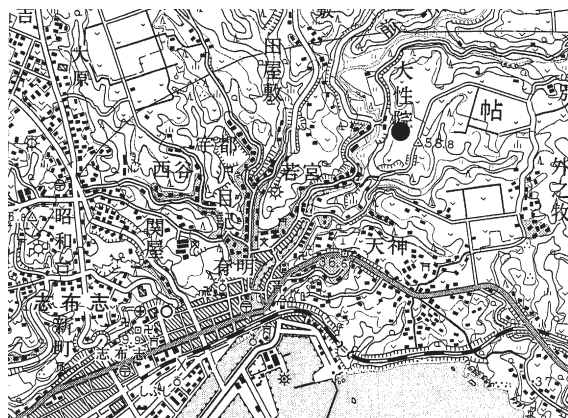
調査は、県営特殊農地保全整備事業（別府地区）に伴い、昭和51年12月に実施した確認調査の結果に基づき、幹線道路敷部分の調査を実施した。1次調査は、県教育委員会が調査主体となり昭和52年3月～4月にかけて実施した。2次調査は、志布志町教育委員会が調査主体となり、県教育委員会の協力を得て、昭和53年7月～8月に実施した。

遺構と遺物

発掘調査の結果、縄文時代前期の集積遺構1基と縄文時代早期・前期・後期・晩期の各時期の遺物が出土した。

集積遺構（第2図）は、深さ10cmの不整形な落ち込みの中に、約10cm～15cm円礫（磨石・敲石）5個と角礫1個の上に長さ約20cmの五角形状の板石が乗った状態で検出された。

縄文時代早期の遺物は、早期後半の塞ノ神式土器が大半であるが、吉田式土器（第3図1）・石坂式土

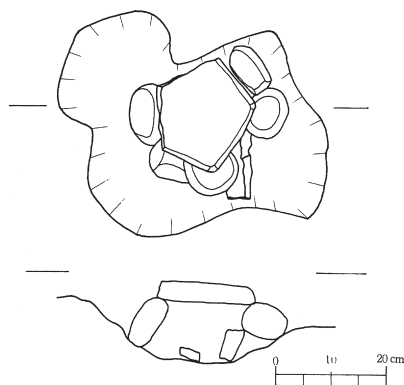


第1図 石踊遺跡の位置

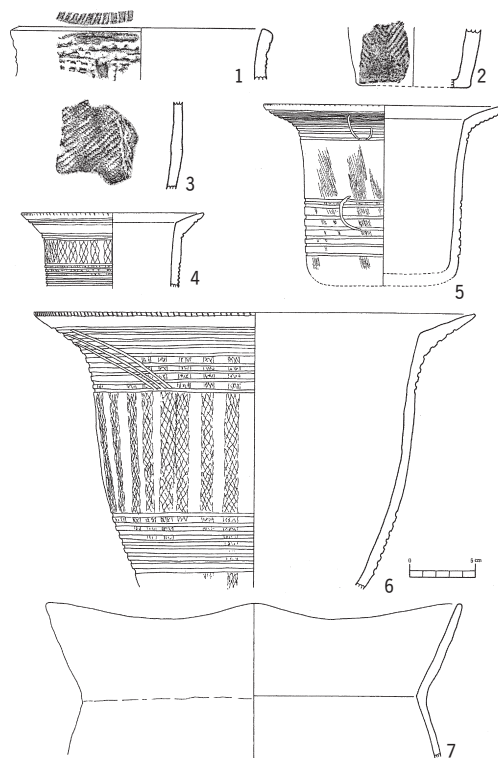
器（第3図2）・平栴式土器（第3図3）もわずかに出土している。

塞ノ神式土器と、撚糸文系のAタイプ（第3図4～7）、貝殻文系のBタイプ（第4図1～3）の両方とも出土している。また、特殊なものとして壺形になる器形のもの（第4図4～6）が見られる。南九州では縄文時代早期に壺形土器が存在することが周知されているが、そのことが認識された最初の遺跡での成果である。

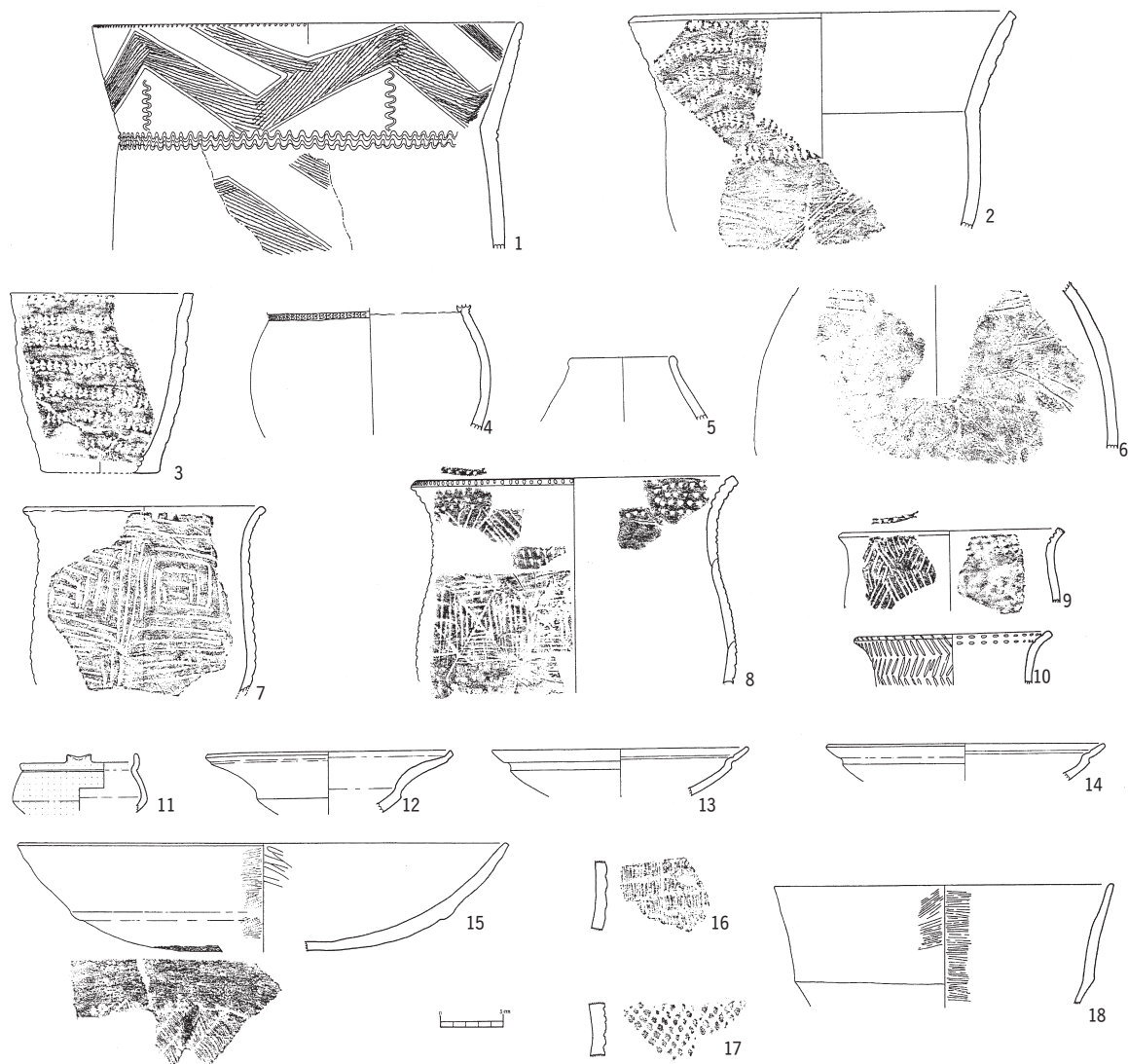
縄文時代前期は、曾畑式土器（第4図7～10）及



第2図 集積遺構（すり石・たたき石）



第3図 出土遺物



第4図 出土遺物

び轟式土器が出土している。曾畑式土器は遺物量も多く、その後の研究のあしがりとなっている。また、石器も磨石・敲石・凹石などが共伴し石器組成の好資料をもたらしした。

縄文時代後期は、岩崎式土器がわずかに出土したのみである。

縄文時代晩期は、黒川式土器が出土しているが、黒色研磨土器（第4図11～14）と編目圧痕文や蓆目圧痕文等の組織痕文土器（第4図15～17）とが見られる。

別府（石踊）遺跡の調査は、それまで縄文時代前期と考えられていた塞ノ神式土器と曾畑式土器が数多く出土するとともにアカホヤ層を挟んで塞ノ神式土器が下に、曾畑式土器が上にあることが判明した。

塞ノ神式土器の方が古いことや縄文時代早期に位置付けられることが明らかになったことが注目された遺跡である。

資料の所在

出土遺物は、志布志町教育委員会に保管されている。

参考文献

- 鹿児島県教育委員会1984「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』29
志布志町教育委員会1979「別府（石踊）遺跡」『志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書』1

（中村耕治）